

ファーゴ教授

Professor Fargo
by Henry James

李 春 喜 訳
LEE Haruki

Henry James's "Professor Fargo" was published in the August issue of *Galaxy* when he was 31 years old. This story is about a conman named Fargo, and his assistant, a father and his hearing-impaired daughter. They form a traveling company that gives shows on ghosts, miracles, mathematical wonders and other dubious supernatural phenomena. The company is in needy circumstances, thus, the father and daughter are unable to leave the company despite their desire to do so. But when their company falls into destitution, Fargo decides to make use of the handicapped girl for some ignoble purposes, which has made her father reluctant to remain in the company. At the end of the story, however, the girl refuses her father's proposal of leaving Fargo and decides to stay with him. Her father ends up living in deep disappointment for the rest of his life.

This story shares one of Henry James's most prominent themes: innocence and reality. In this story, the inner thoughts, feelings, and emotions of the handicapped girl are never depicted. The narrator is also a character in the story. Thus, we are unable to enter the thoughts of the characters except for those of the narrator. In this sense, Henry James's decision to write the story in the first person is appropriate as it keeps the girl's decision to stay with Fargo a mystery. It can be said that "Professor Fargo" is one of the rare cases where the content and form harmoniously match.

キーワード

Henry James (ヘンリー・ジェイムズ) Short Story (短編) Translation (翻訳)
Content (内容) Form (形式)

I

その小さなP町は列車が通る場所から離れており、馬車で二五マイル走らなければならなかった。道路の原始的な状態のために身体には試練が与えられ、退屈な風景のために心は疲弊した。ゆえに、やっと目的地に到着しても、その人物のために出向いてきた当の本人が、小型の馬車で三日間の休暇に出かけたことを知ったので、目的地に着いた事実は傷ついた身体と精神に対して何の慰めにもならなかった。何の得にもならないさまざまな表現で失望を爆発させたあと、営業マンの柔軟な哲学にふさわしい取るべき唯一の選択肢は、宿に部屋をとり、彼が帰ってくることを待つことだった。P町に住んで楽しい場所でないことは明らかだった。しかし、私はもっとひどい時間を耐え忍んできたし、ことわざにもあるように、担当者に伝えるべき不満もあるので、ここで溜まった苛々は、対決のときのために私を武装してくれるだろう。さらに、三ヶ月も列車に揺られていて私は死ぬほど疲れていた。列車の警笛が聞こえないところで二、三日過ごせるという誘惑は歓迎できなくもなかった。耳に聞こえてきそうなほどのある種の静寂がこの小さな町を覆っているように思われた。私がこの町に全関心を向けることを妨げるものは何もないようだった。宿のベランダをしばらくぶらぶらしていたが、私の存在は、いつものように集まってきては椅子を傾けくつろいでいる偏狭な地元民を覆っている沈黙の魔法を深めるだけのようだった。私は表通りの埃っぽい歩道の厚板の長さを三度測り、家の前庭の立葵を数え、ガラス戸の表札を読んだ。そしてとうとう、やけくそになって墓地を訪れた。九月の終わりだったが気温は高かった。この新しい施設には葬儀の際に役立つような日陰はほとんど育っていなかった。シダレヤナギもなければ、暗い糸杉も生育しておらず、故人を偲ぶために訪れた参列者に提供できるような心地良い木陰はどこにもなかった。黄色い草と白い墓石が熱い日射しにぎらぎら光っていた。墓地にいる幽霊のように浮かれているというわけではなかった。私は時間を間違えて訪れたお参り客ほどにもその場にはいなかった。しかし、田舎の墓碑銘を読むのが好きだったので、もう少し日が陰ったら戻ってくることにした。宿に帰る途中、最近できたと思われる交差点で町の会館を見つけた。そして、外国を旅行しているとき、フランスやイタリアの古い市民の娯楽施設に足を向けるのと同じように、何らかの娯楽への期待感を持ってその入口に向かって進んだ。もちろん、私の入場をチェックするような制服を着た係員はいなかった。私は誰にも止められることもなくその建物の大部分を占めている飾り気のない広い部屋に入っていった。それは町の集会や党員集会やその他の厳かな儀式によく使われる部屋だった。しかし、今日は少し世俗的な目的のために使用されているようだった。どちらかというところ騒々しいタイプの旅回りの講演家が、荷物をほどこき舞台装置の準備をしていた。といっても、小さなテーブルが一つと一列に並んだ椅子が三脚、舞台後方の飾り気のない壁に展示用の黒ずんだ旗が吊り下げられているだけだった。その旗の不恰好な花飾りを何とか見映えの良いものにしようと、講演者本人が努力していた。床の上では別の人物が、印刷した大量の

ファーゴ教授（李）

チラシに公演の日程を赤のチョークでなぐり書きしていた。私がおとりかかったとき、彼がそのうちの一枚を私に手渡した。その日の夕方になにかすることができて私は嬉しくなった。チラシの下半分には公演の見どころについて書いた新聞の抜粋が掲載されていた。私の記憶では、見出しには次のように書いてあったと思う。

霊界からのメッセージ

女性や子どもにも分かる高度な数学

新しい啓示！新しい科学！

偉大な道徳と科学の結合

覚醒した無謬の霊媒師、魔術師、透視能力者、預言者、占い師！

ファーゴ教授

高名な電光石火の計算機、数学の改革者

ギフォード大佐！

公演はこのような内容だった。しかし、記憶には残っていないがこれ以外にもいろいろと周縁的な出し物があった。私が公演の内容を理解するまでに、擦り切れた旗を直していた人物が振り向き、私がいるのに気がつくと、「覚醒した無謬の霊媒師」だけが持つ表情を見せた。実際のところ、人々が預言者や夢想家に対して伝統的に持っている浮世離れしてやつれた雰囲気がファーゴ教授にあるというわけではなかった。それどころか、表面的には、霊的な要素を圧倒していることを体型の肉感的な要素が楽しんでいるように見えた。背は高く太っていた。精力的で頑強な雰囲気があった。赤味がかったふさふさとした髪はライオンのように額から後ろにかき上げられ、つやのある赤褐色の頬髯は、広いが決して清潔とはいえないシャツの前に満足気に広がっていた。色あせた黒い夜会服を着ており、太った右手の大きな人差し指には巨大なトルコ石の指輪をはめていたが、それは祝祭的な雰囲気を醸し出す彼の服装によく似合っていた。怪しい連中との親しい付き合いは彼の身体全体にその痕跡をとどめていたが、ちらっと見ただけでは、もっと低俗な芸をする人物——たとえば、ジョセフィーヌ嬢が輪を飛び抜けたりしている一方で、きらきらしたタイトスをはいてライオンの口の中をのぞき込んだり、サーカスの舞台上で鞭を振り回したりしたりする人物——に見えたかもしれない。しかし、しっかりと彼の目を見れば、彼がもう少し洗練されたショーを提供する人物であることをその目は示していた。ライオンの口よりもっと奇妙な場所をのぞき込んだことのある目だった。私の理解では、その目が主張しているのは、未来を見とおすことができるということである。しかしもしそれが本当なら、エゼキエル書やエレミア書の預言も、完璧なアメリカ的抜け目なさや変わるところがないと言わざるをえない。ひとこと言えば、その目は私が今までに見た中でもっとも礼儀を欠いた目だった。それはまるで、私心のない博愛心を人に納得させるために、礼儀を欠い

ていることを示す特別な徴を引き受けているかのような目だった。その目は赤味を帯びた茶色だったので、夜の公演ではそれを「素晴らしい目だわ」という女性もいるだろう。P町の住人のような田舎じみた外見を私がしていないことを見て取り、ファーゴ教授は私の支持を確保しておく価値があると見なしたようだった。両手をポケットに入れて演壇の横木まで出てきて、彼は親しげにうなずいた。

「今夜、見にきなさい！」とひょうきんな命令口調で言った。

「多分そうだと思います。このP町の夜の時間をつぶしてくれるものなら何だって」と私は答えた。

「金を払うだけの価値はあるから」と教授は再び答えた。「私のショーは一流だ。よくあるいかさまじゃないよ。私たちは完璧だ。仲間たちと私はそれぞれの役目において申し分ない。もしあなたが知的で難しい問題がお好きなら、十分頭を使っただけのような問題を差し上げましょう」教授は非常にゆっくりとおだやかに話した。彼のよくとおる豊かな声は、客のいないホールに響きわたった。明らかに彼は自分の声を聞くのが好きだった。つま先立ちになって、間もなく始まる自分の公演を確認していた。「あまり自分の公演の話をしたくないのだが」と彼は続けた。「私は控えめな男です。私に何ができるかはご自分の目でお確かめになればいい。しかし、私の友人である大佐に関心を持ってもらいたいです。彼は旅回りのショーではめったにお目にかかれない人物です！おそらく、雑多な人の集まりであるお客さんに話しかけるには最も卓越した男です。難しい数学については心配しなくていいんです。すべてビリヤードのゲームのように楽しいものにしてあります。計算をするのは彼の娘なんです。礼節という観点から彼女のことはチラシには書きませんでしたかね。ここだけの話ですが、彼女は申し分ない十七歳の娘です」

預言者と親しく会話をするなんてそう毎日あることではない。しかも、そんな職業の舞台裏をのぞく機会を逃すのはあまりにももったいない。私は教授に、移動のことや、費用のことや移動公演の運不運がもたらす複雑な気持ちなどについて質問してみた。そして思い切って、二人だけの話として、そんなに素晴らしい霊媒師なら、三流の魔術師である必要はないのではないかと尋ねてみた。彼は頭を一方にかしげ、頬髯をなでながら立っていた。半分閉じた抜け目のないまぶたの間から私を見つめ、クックッと乾いた小さな笑い声を上げた。それは、私が理解するところでは、彼の奇跡を信じられない私への同情か、洗練された彼の言動に対する私の信頼への思いやりを表していた。

「正直に白状しますが」と私は言った。「僕は疑い深い人間でね。霊界からのメッセージなんて信じないんです。あなたのような職業の人は霊界から聞いてきたというようなことをおっしゃいますが、この世では平凡に話していた人が、気の滅入るような不老不死のおかげで流麗で華麗な話し方できるようになるというようなことを僕は信じないんです。生涯にわたって素晴らしい英語で自分を表現していた人が、夕食のテーブルをバンバン叩いて会話をするようなこ

とに満足するなんて信じられません。中国の刑法について知らないのと同じように、死後の世界について何事かを知っているとは思えません。あなただって信じているようには見えませんが、もちろん、自分がすることの足を自分で引っ張るようなことを期待しているわけではありませんが。あなたの意図が純粹で、あなたの行う奇跡がいかさまでないことを詳しく語っていただきたいのです」

教授は預言者のような頬髯をなでながら黙っていた。ついに、善意にあふれたゆっくりとした話し方で次のように言った。「霊界に仲の良い友人がいるかね？」

「あなたがいう霊界というのが何だか分かりませんが、亡くなった友人は何人かいます」と私は答えた。

「会いたいかね？」と教授は即座に尋ねた。

「いいえ。会いたくないです！」

教授は首を横に振った。

「豊かな性質をお持ちじゃないようだ」と彼は穏やかに言った。

「それは豊かなという言葉の意味によりますが。ある事柄には好奇心をたっぷり持っていますよ。その台の上に立って、あなたが正直な人間だと即座に言っていたら僕は格別に喜んだと思います」

私のこの要望を聞いて彼は楽しんでいるように見えた。答える代りに彼は次のように言った。「私の腕を思いつく限りの方法できつく縛ってみたまえ。そうして、君の曾おじいさんを呼び出して時計を止めてもらおう。炉棚のうえ五フィートのところにある時計を踵で止めるわけにはいかないからな」

「そうでもないかもしれません。あなたはとても頭が良さそうですから」と私は言った。

「頭が良いこととこれとは何の関係もないんだ。私には強い磁気作用があるんだ」

「僕の曾おじいさんを天から呼び寄せるといいますか？」

「そうだ。もし回路をつなげることができたらな。私に何ができるか今夜ご覧に入れよう。きっと満足していただけると思うがな。もし満足していただければ、喜んで個人的にやっあげよう。私は霊媒による治療もしておるのです。足に痛いところはないかな？そこに座っていただければ、ブーツを脱ぐと同時に痛みもたちどころに取り除いてあげよう」

その可能性に対して敬意を払うために、私はただ頭を下げただけだった。少なくとも、彼の性質は「豊か」であるようだった。私は疑り深い人間ではあるけれども、その夜の公演では偏見を持たずに拍手を送ると約束して彼と別れた。出ていく途中、会館の最上階に上がったとき、低い滑らかな音色の口笛を彼が吹いているのが聞こえた。私が振り向くと、戻ってくるように手招きをした。私が戻ると、台の上から身を乗り出して、がっしりとした人差し指を高く掲げた。「私は正直な人間だと言いたいただけなんだ！」と彼は言った。

ホテルへ帰る途中、教授の正直さをさらに解明してくれる機会を待つ時間がより長く感じら

れていることに気がついた。しかし幸運にも、その待ち時間を短くしてくれるものが見つかった。宿の休憩室にある本棚を何げなく調べていると、農家の人たちの暦本やメソジスト派の人たちのパンフレットの中にぼろぼろになった『ドン・キホーテ』を一冊見つけた。部屋に帰ると、椅子を後ろに傾け、才気に富んだスペインの小貴族と楽しく会話を始めた。その「磁気」はファーゴ教授のそれよりも強力だった。あまりにも強烈だったので時間の感覚を失ってしまい、ようやく時計を見たとき、一時間も前に夕食が終わってしまっていることに気がついた。あまり洗練されているとはいえないこの宿の「サービス」の方針は厳しく民主的で、ピーフステキパイやハックルベリープディングには飢えていないという上品さを見せてしまうと、これらの料理を食堂で管理している短い袖のドレスを着た、ぴったりとした長い巻き毛の若い女性の態度は横柄になり、料理を私の関心に向けることさえしなかった。そこで私はその冷たくなった料理を一人で食べることになった。食事のあと一時間ほど『ドン・キホーテ』を読み、それから、午前中の約束に従って墓地の墓石が長い影を落とすのを見にいった。私は墓碑銘を読んでがっかりした。それらはすべて、人々がまだ霊的なものを純粹に信じていた時代の後に書かれたものだったからだ。墓地は丘の両端を占めていた。丘の上まで歩いていき周囲を見わたしたとき、自分が唯一の訪問者ではないことに気がついた。静かに話ができそうな場所に二人の訪問客がいた。一人は若い女性だった。黒い服を着て、顔を私の方に向けて墓石の上に座っていた。しかしその姿勢にもかかわらず、同行者への配慮に気を取られていたので私の存在には気がついていないように見えた。同行者は背が高くがっちりとした体つきで、私の方に背を向けて彼女の前に立っていた。距離がかなりあったので、彼らの話し声は聞こえなかった。実のところ、数分たつと、彼らは実際に話をしていないのではないかと思いはじめた。それにもかかわらず、若い女性の目は男の顔をじっと見つめたままだった。一番効果があると分かっている方法で彼は彼女を虜にしていた。とても可愛い女性だった。帽子は脱いで膝の上に置いていた。唇を開き、目は相手の顔を熱心に見つめていた。突然、彼女は素早く明るい笑顔を見せ、激しく手を動かし、人差し指を唇にあてた。その動きと動かし方が彼女について語っていた。聴覚障害者なのだ。だからその男性は指で彼女に話しかけていたのだ。私はもう少し彼女を見ていたかったが、失礼だと思い、別の方角に向かってその場を立ち去った。しかし、墓地を出ようとしたとき、彼女が連れの男性と一緒に出口に向かう道を歩いてくるのが見えた。男性の顔がこちらに向けられており、ひさしのある高い白い帽子をかぶっていたが、その人物が誰だか私にはすぐに分かった。ファーゴ教授に墓地で会うのはしごく当然のことだった。というのも、亡くなった人たちについての情報を手に入れるための最も簡単な方法は、死のこちら側の外衣にできるだけ近づくことだからである。しかも、もし彼が、亡くなった親戚からのメッセージを集まった町の人たちに伝えるつもりなら、地元の墓碑銘をていねいに読み、名前や日付などを「手に入れておく」のは当然のことだからである。しかし私のそばをとおり過ぎ、挨拶のために彼が手を振ったとき、公演の舞台裏を見られてしまったことを認めるような素振り

は彼にはまったくなかった。それも当然と言えば当然だった。しかし私が驚いたのは、ここまで低俗な男がこんなに魅力的な女性とチームを組んでいるということだった。彼女が私のそばをとおろかかったとき、人がよく言うように、目で聞くしか仕方がなく、疑うことを知らない気の毒な人たちのきっぱりとした目つきで私を見た。肌の露出部分が多いシンプルな服を着ていたが、彼女の体の動きは上品だった。いったい彼女は何者で、どうして彼は彼女を仲間にすることができたのだろうか？ 結局のところ私には関係のないことだが、少し速足で歩き去る彼らの後ろをゆっくりと歩きながら、教授のどっしりとした足取りと女性のすべるような歩みを見ていると、実のところ、私の祖先の最も尊敬すべき人たちを永遠の床から呼び覚まし、時計を止めさせる何かがあるのではないかと思い始めた。

II

彼のチラシはその役目を果たした。その夜私が会館に入ったとき、真剣に公演を楽しみにしている聴衆で一杯だった。その夜、P町の住宅は明らかに空き家ばかりだったに違いない。これから催されるイベントの雰囲気を読み取ろうとして観客が舞台を調べている間に、町を構成する人々の社会的な外観を調べる時間が十分あった。しばらくすると、体格のよい若い田舎者がアコーディオンを持って登場し、それを使って一種の独創的な悲しい曲を演奏した。この神秘的な序曲のすぐあとで、ファーゴ教授は自分の部隊を整列させた。まず第一に彼自身がいた。ライオンのような髪型をして、黒い礼服を着用し、トルコ石の指輪をしていた。次に、教授が聴衆に向かってしたような大げさな挨拶もせず、厳かに堅苦しく歩いて出てきた年配の男性がいた。そして、黒いドレスを着た若い女性が彼の腕をつかんで出てきた。ファーゴ教授は、椅子を並べたり、ランプを上向きにしたり、舞台の後ろの旗にちょっとした細工をすることによって、何とか観客に自分の存在を身近に感じてもらうことができた。彼のアシスタントは静かに壁にもたれていた。舞台上の若い女性が、他でもなく、教授が墓地の調査に行ったときに同行していた女性であることはすぐに分かった。そして今朝、娘をアシスタントとして数学的な奇跡を実演する人物について彼が語っていたことを思い出した。娘の虚弱さと可愛い顔つきが、公演のこの場面に絵のように美しい関心をもたらすことを約束していた。しかし一方で、低く抑えられたとは言えないつぶやき声や女性客の激しい身振りから、公演に出演する若い女性に要求される直接的な美しさに彼女は欠けていると思われることが分かった。彼女の地味な黒いドレスは不評だった。入場料を払っているのだから、華やかな衣装やブレスレットをいくつか期待するのは当然である。しかし気の毒にも彼女は、うんざりしたように頭を壁にもたせかけ、まるで無関心な様子で自分の場所に座っていた。それはまるで、もしその気になれば、彼女のことを値踏みしている客の妙な帽子の数を事もなげに数えることができるかのようだった。彼女の父親は、両ひざの間に杖を立て、握りの部分に両手を置き、彼女の隣りで

背筋を伸ばして座っていた。年齢は六五歳で、背が高く痩せていて、青白い顔色で真剣な面持ちだった。頭上にぶらさがっているランプのせいで顔の陰影が深くなり、表情は絵に描いた仮面のように変化していた。頭部にはまったく髪がなく、広くて形の良い額はランプの光の中で古い象牙の輝きを帯びていた。深い影に目は覆われていて、くすぶっている炎の輝きとともに、瞳はその奥からまっすぐ前を見つめていた。高く弓なりにそった鼻の陰が口と顎に長い影を落とし、口髭のそばの二本の深い皺が妙に彼を悲劇的に見せていた。それだけではなく、奇妙にも彼はその悲劇的な外見に慣れ親しんでいるように見えた。彼の娘と教授は古い友人だと私は理解していた。しかし、憂鬱という昔からあるこの際立った事例に私はどこで出会ったのだろうか？彼の視線は動かないように見えたが、こっそりと聴衆を眺め回しているのではないかと思った。とうとう彼の視線が私の視線と合い、私が田舎者ではなく、論理的な思考ができる分別のある人間であることを悟ったことを示す陰気な輝きをその視線が一瞬放ったように思われた。次の瞬間、彼が何者であるかを理解した。彼は生きたドン・キホーテだったのである。スペイン的な褐色の顔色、広い額、紳士的な容貌、顔の皺、口髭、そして悲しみ、それらすべてが彼がドン・キホーテであることを表していた。

ファーゴ教授の講義はひどかった。無意味なことを彼がかなり話すであろうことは予測していたが、もう少し機知に富んだ無意味なものだと想像していた。おそらく、私が感じ取ったよりもさらに深い機知がそこにはあったのだろう。そして、その卓越した抜け目なさにおいて、彼はまさしく聴衆が望んでいたものを与えていたのである。もちろん、地方の聴衆というものは、それなりに難解なことに対する関心と、どんなものにも退屈しないことに純粋な誇りを持っているのは事実である。教授は聴衆の脈を測り、反応のない彼らのまじめな沈黙の中に潜在的な共感という大切なものを感じ取っていたのではないかと思う。教授の公演は失敗に終わりつつあったと言うべきだろう。それでも彼は、おそらく、それを関心の高さと畏敬の念のほとばしりだと言うであろう。豪華なプログラムに対して明らかにその最低限を提供したにすぎず、ほとんどが取るに足らない内容で、見るべきものはわずかしかなかった。彼が奇跡と呼ぶものは、常にレトリカルな意味でそうであるにすぎなかった。地球の生命や夏の土地について彼は語った。そして、夏の土地に住む人々との親密さから生まれたさまざまな逸話についても語った。しかし残念なことに、私たちは幽霊に会うことなく夜は過ぎていった。多くの「町の名士」たちが舞台上上がり、催眠状態になるよう手ほどきを受けた。しかし、がっしりとした体格の農夫気質のP町の人たちは、ファーゴ教授の台本どおりの誘導に影響を受けることはまったくなかった。全体から見て試みは失敗だった。もし見るべきものがあつたとすれば、それは、会場の人たちの進歩の遅れと彼が呼んだものに失敗の原因を押しつけた彼のずうずうしさだった。三、四人の若い女性に対しては少しは上手くいった。そのうちの一人は目をつぶり体を震わせた。別の女性は神経症的なくすくす笑いが止まらなくなった。また別の女性は突然泣き出したので、教授の戒めるようなウィンクとともに友人のところに戻された。全員が他のすべて

の人やその家族の歴史を知っているのだから、洗礼名や亡くなった町の名士の最後の病状に関する半ダースばかりの的確な推測によって、おそらくある種のどよめきが起こった。また別の著名な町の一団が舞台上上がり、亡くなった友人の名前を小さな紙切れに書き、それを帽子の中に入れた。ファーゴ教授は腕を組み、あたかもインスピレーションを喚起するかのように頬髯をつかんだ。ついに教授は舞台の奥に座っている若い女性に近づき、彼女の手を取ると前に出てこさせた。彼女は帽子の中から紙を取り出し、教授に見えるように一枚ずつ掲げた。「これは演出ではありません」と、聴衆に彼女を紹介しながら大げさな手振りとともに彼は言った。「この若い女性は耳が聞こえないのです」教授の手振りに従って、P町の科学的好奇心を代表してじっと考え込んでいる銀髪の参加者の一人に、彼女は紙切れを手渡した。彼は教授の推測が事実かどうか検証した。ファーゴ教授は思い切って「アバイジャ」とか「メリンダ」とか言ってみたが、大抵は、「エゼキエル」だったり「ヘプジバ」だったりした。しかし、教授の天才が三回ほど勝利することがあった。するとすぐ、彼の基準に見合う聴衆ではなかったが、彼は自分に盛大な拍手を送った。このような聴衆の前に出てくることを霊は恥ずかしがっているというのを彼は認めた。しかし、彼が滞在しているホテルに来てくれさえすれば、もっと素晴らしい実演を個人的に請け合うと言って公演を終えた。

公演はまったくひどい詐欺だったので、終わったとき私はほっとした。公演が続いている間、見ているようでも、聞いているようでも、理解しているようでもない年配の男性が舞台の後ろで身動きせずじっと座っていた。私は、彼は公演についてどう思っているのだろうか、そして、それに自分が参加することを認めるためにどれほどの対価を自らの自尊心に払ったのだろうかと考えた。実際、精神的には彼は存在していないかのように思われた。まるで、集中的な努力によって意識を空っぽにすることに成功し、一種のトランス状態の中で自らの出番を待っているようだった。一度だけ彼が動いたことがあった。それはファーゴ教授がやってきて彼の娘の手を取ったときだった。彼はわずかに動いたが、自制心を取り戻し、手を少し下げ、両目を閉じた。娘が彼の横に戻るまで目は閉じたままだった。休憩時間があつた。その間、ファーゴ教授は舞台を歩き回りながら、髪を振りかざし、額の汗を拭い、まるで種を蒔いたあと即座に種子が発芽するのを待っているかのように、尊大な雰囲気の漂った慈悲心で聴衆を観察していた。ついに彼はテーブルを叩き、その年配の男性を紹介した。それは偉大なる数学的魔術師であり電光石火の計算機であるギフォード大佐だった。そのあと、代わりに教授は舞台の奥に退いてしまった——それは、揺れ動くたてがみとたなびく頬髯を持ち、トルコ石の指輪が手を飾り、全体に体が大きく目につく存在である男が、何らかの状況下で奥に退くということが可能であるとしたらということだが。ギフォード大佐は前に進み出てお辞儀をした。大佐の娘は、両手を前に交差させ落ち着いて気取らず父の横に立っていた。それは、「ヴィルヘルム・マイスター」のミニョンが高齢のハーブ奏者とグループになるときの子どもの礼節さと落ち着きを思い出させるものだった。私はギフォード大佐の実演を最高に楽しんだ。しかし正直に白状する

が、それは、大佐の実演それ自体の素晴らしさとは別のものだった。残念ながら、一般的な成功をおさめるには彼の実演は多すぎたし、同時にその一つ一つに対する説明は十分ではなかった。つまり、科学的な仕組みは非常に巧妙に仕掛けられていたが、一般の人を楽しませる工夫はまるでなされていなかったのだ。もし、誰も電話をかけてきそうにない雨の降る夕方に、ランプの灯りのもとで、きれいに印刷されたパンフレットで大佐の実演について——実演の本質的な部分——を読んでいたら、その叙述のスタイルによって著者の風変りな才気の煥発と、思いもよらなかった自らの知性の活性化に魅了されたであろう。しかし、微分のように複雑なことよりも基本的なことになじみのある知性に自分は向いていると薦する明白な努力にもかかわらず、ギフォード大佐は、慈悲深くかつ恐ろしく理解不能だった。私が理解できる範囲では、大佐は巨大な因数にまで延長した乗数表を考案し、そのことによって会計学の世界に革命をもたらすことができるということなのだと思う。理論はあったが、大佐のとりとめのない情熱のために高等数学の霧の中でそれは見失われてしまった。実践の方は、娘の協力のおかげではるかに素晴らしく具体的だった。私が興味を持ったのは大佐の理論ではなく彼の人柄だった。明らかに前向きな年老いた男性であるけれども、妙に単純で、もったいぶったところがなかった。自らの学説の究極の重要性に対する強い信念のために、彼の振る舞いには厳かな静寂が漂っていた。ファーゴ教授の大きな言い回しの残響音が、大佐の温和な誠実さに対する魅力を増していた。彼は震えた弱い声で話したが、それがときどき興奮して高くうわずむことがあり、そのあと、疲れたように悲しげな調子へと落ち着くのだった。彼は一つの考えを持った年老いた男性だったが、その考えというのは信仰と言っていいほどのものだった。彼に対して親切な気持ちにならないのは不可能だった。また彼は、奇妙な行動をし、奇妙なことを言うと噂されている——たとえば言えば、乱暴に扱わない限り何とか壊れないでいるちょっとした陶器のように「ひびが入っている」——こざっぱりとして目つきの鋭い高齢者のために、まだ墮落を知らない人なら受け入れるであろう漠然とした憐れみと敬意が交じった善意のようなものを、聴衆の心に活性化させたのではないかと想像せざるを得なかった。しかし、いったん彼女の能力の素晴らしさを知った聴衆が心からの称賛を与えたのは娘の方だった。今、舞台の前の明るい光の中に立っているのだから、彼女の可愛さの魅力を観察することができた。それは眩いばかりの美しさではなく、いわば瘦せてほっそりとした美しさだった。繊細ではかない典型的なアメリカ人だった。胸はうすく、首は極端に細かった。顔は細長くて、額は広く前に出ていた。とてもふわふわしたブロンドの髪が頭部を取り囲み、頬はとても淡いピンク色に染まっていた。無邪気で魅力的な目をして、彼女の態度には無意識で風変りな幸福感があったので、奇跡の持つ作用はこれほどまでに汚れのない小さな精神に対してさえ可能なのだというある種あたらしい考えを持って人は彼女を見ていた。黒板が二つ壁にかけてあり、そのうちの一つに大佐は素早く問題を書いていた。もちろんそれは、聴衆の中でも知的なレベルの人に向けられたものだった。娘はそれをちらっと見ると、私たちが十数える前に、もう一方の黒板に大きくはっきりと答え

を書き上げた。それから、検証のためその問題を理解できる客が壇上に招かれたが、娘の解答は常に正しいことが確認された。彼女は実際計算の妖精だった。彼女の父は一連の知的パフォーマンスを娘にさせたが、それはまるで、熟練した歌手が声で披露する技能のように鮮やかだった。娘との意思疎通を黒板を使ってだけすることをとおして、彼は、自らの超越乗算システムの美しさを示す実例を彼女から大量に引き出した。掛け合わせるために大きな数字を二つあげよう参加していた一人に求めた。大佐はその二つを書き出した。一瞬考え込むように立っていたが、その娘が人差し指で自分の額に触れるだけで、彼女は驚異的な解答を黒板に書いた。父親は自らのシステムに則って黒板の上で素早く演算（娘はそれを頭の中で行った）をし、そのあとで、通常行われている回りくどい方法で同じことを繰り返すことによって、すべての聴衆を満足させた。ギフォード大佐の魔法はこれですべてだった。とても退屈のように思えるかもしれないが、それは実に魅力的で、私は自分の知的システムの繊細な部分に心地良い刺激が与えられたような感じがした。今まで以上に自分が知的生物であるような感じがした。P町にきて文化的な教育を受けることになるとは夢にも思っていなかった。

いずれにせよ、次の日の朝は、忍耐力の教育を受けることになるようだった。その日は日曜日で、朝目を覚ますと、ばらばらと窓ガラスを打つ雨の音が聞こえた。P町における雨の日曜日はどれほど柔軟な精神の持ち主にとっても気分がふさぎ込むような状況だった。しかしスリッパに足を入れたとき、読みかけの『ドン・キホーテ』のことを思い出し、サンチョ・パンサから自分の状況に応用できる哲学的なことわざか何かを借りることにした。しかし『ドン・キホーテ』は結果的に思わぬ仕方で私を慰めてくれることになった。泥のようなコーヒーと酸っぱい緑茶の争いを心の中で秤にかけながら宿の食堂に降りていくと、昨晚の友人もまた宿のもてなしを受けているところだった。そこは町の唯一の宿なのだから、私たちが同じ宿に滞在していることは、もう少し洞察力のある人ならすでに気がついてはいるはずだった。都合がよいことに、ファーゴ教授はいなかった。幽霊に会う人が午前中の遅くまでベッドにいるのはしごく当然のこのように思われた。陰気で高齢な数学者は朝食のテーブルにつき、何もついでないトーストを幾何学図形にカットしていた。私が食堂に入ってくるといねいにお辞儀をし、ふやけた多角形をお茶に浸し始めた。娘は窓のそばでガラスに額をもたせかけ、通りを流れる黄色い土の海を眺めていた。聴覚に障害があるにもかかわらず、私がそばにいる気配を聞き取り、彼女が振り向いて私の方を見たとき、私はまだ部屋に二分といなかった。公演の疲れの痕跡は彼女にはなく、今までと同じ透きとおった目をした小さくて静かな妖精だった。昼間に見ると、彼女の黒いドレスはひどくみすぼらしいものだった。父親のフロックコートは軍人のような正確さで顎まで留められていたが、遠い昔にそれが持っていた光沢は、必死にブラシをかけてきたことによる陰気な輝きを取って代わられていた。私は、ファーゴ教授がけちな興行主か、もしくは、「偉大な道徳と科学の結合」がP町でそうであったようにいつも大成功というわけではないのではないかと思った。こんなことを考えていると、教授が上機嫌で入ってき

た。私はそれをめったにない公演の成功の証しだと思った。

「さあ、どうですか」視線が私をとらえると彼は叫んだ。「さあ、何とおっしゃいます？なかなか上出来だったでしょう？本物のエンターテイメントと言ってもいいと思いますが。もう言ってもいいと思うが、こちらの青年はいわゆる懐疑主義者の一人なんです」と、大佐に向かって彼はさらに続けた。「彼は昨日やってきたのです。そして一人で敵地に入ってきて、霊の存在を無視し、私の不正行為を疑い、個人としての見解でいいから、私と君が詐欺師であることを認めよと言ったのです。我々はすっかり君を満足させたと思うが！」

大佐は何も言わず、深刻な顔つきでトーストをお茶に浸し続けていた。「気の毒に！彼は自分の同僚を軽蔑しているのだ——それは僕も同じだ」と私は独り事を言った。「お詫びします。そんなつもりはなかったのです。こちらの男性の実演には大変関心を持ちました」私は心からそう言った。そして大佐にお辞儀をした。「その完全なる誠意と真実は素晴らしいものでした」

「お褒めのお言葉をありがとうございます」と教授は言った。「大佐がキリストの弟子だとすれば、私はやくざ者というわけですね。いいでしょう。しかしもし仮にそうだとしても、私は半端じゃありませんから！」強くポケットを叩いて彼は断言した。「いずれにせよ、我々は一つの船に乗っておるのです」それから教授はギフォード嬢が立っている窓に向かって歩いていった。教授が部屋に入ってきたとき、私が部屋に入ってきたときには彼女は教授の方を向いていなかった。大佐は私の賛辞に応じて穏やかな表情で私を見た。彼に対する敬意をもう一度口にした。お茶をかき回しながら彼は黙って聞いていた。自信と謙遜とが奇妙に入り混じった表情をしていた。それはまるで、彼のことを私が笑っているのかもしれない、もしそうでなければそれはとても素晴らしいことなのだが、と考えているかのようだった。私が楽しんだのは明らかに彼が担当した公演の後半部分であることを主張し続けた。私の敬意のこもった共感を徐々に確信し、もし二人だけになることができ、私のことをもう少し知り、何もかも話してしまうことができればどんなに胸のつかえがとれるだろうと、口には出さずに伝えているように見えた。できるだけ早くその機会を持てるようにしようと私は決心した。一方教授は、朝食を待っている間、窓際で大佐の娘に手話を試していた。慣れていないので文を作るのに長い時間がかかったが、彼女の顔の前で太った大きなこぶしを振り回しながら、勇敢にも会話を続けていた。彼女は立ったまま彼の未熟な手話をとても忍耐強く耐え、私が墓地でちらっと見たのと同じ熱心さで教授の手振りを見ていた。私の女性の友人の多くは絶えず舌を動かすことを楽しんでいるが、その経験からすると、私には教授が置かれている立場を正確に理解することができなかった。しかし、便宜的にあらゆる愛情表現の原因とされる憐みがあり、その憐みが向けられる可愛い女性との長い静かなまなざしの交換の中で感じられる親近感がどれほど心地良いものであるかということは容易に想像することができた。しばらくすると大佐がカップを押しつけ、振り返って腕を組んだ。そして、眉をひそめて教授をじっと見つめた。彼の表情の中に道徳的な苦痛が余すところなく顕れているのが読み取れたように思えた。運命の重圧が彼

らを仲間にしていた。しかし大佐は、娘と教授が密かに親しくなる限界を注意深く守っていた。持ち前のずうずうしさにもかかわらず、教授はその限界を守っていた。彼は突然時計を取り出し、大声を出してコーヒーを注文し、まもなく食事の席についた。それは、預言者の体質には豊富な飲食物が必要であることを示していた。大佐の娘は、まるで何もしないことに慣れているかのように、あちこちをぼんやり見ながら部屋を歩き回った。彼女と目が合ったとき、一瞬彼女の顔がこわばったが、彼女は明るく微笑んだ。そして、それもまた心の中で次のように言うことに慣れているかのようだった。「自分がちょっと変なのは分かっています。でも、私を怖がらないで下さい」 霊を呼び出すよう教授に要請するためにやってきた若い女性が紹介されたとき、すっかり準備は整っていたが、ニューイングランドの田舎の宿で提供されるずらっと並んだ多くの皿に彼はまだほとんど手をつけていなかった。それはさまざまな大きさや形をした石鹸受けのようだった。紹介された女性は巻き毛で、巨大な傘の原型のようなものを持っていた。超自然現象に対する早朝の好奇心は冷たい秋の嵐によっても解消されることはなかった。血色の良い若い男性の「鉄板写真」を無造作に彼女は取り出した。現実にはその男性は亡くなっているのだが、彼の霊に会いたいと彼女は要求した。教授にとっては悪くない一日の始まりだった。椅子に腰かけるよう礼儀正しく彼女に勧め、すべてにおいて彼女が満足することを約束した。教授が急いで朝食を片づけている間、大佐の娘は親しい人を失ったその女性と仲良くなって、男性の写真を女性の手からやさしく取って調べた。そして、少し顔をしかめて首をふった。その女性は気分を害することもなく笑い、「聴覚障害があるなんて信じない」と大佐の娘の耳に向かって大声で叫んだ。大佐は、その女性がやってきて教授の能力について説明しているのに深く同情して観察したあと、自分の同僚の恥知らずな主張が生み出す光景を見ないようにするかのように窓の方を向いていた。しかし女性のその発言を耳にしたとき、大佐は再びその女性の方に振り向き、足先から頭までを冷たく観察したあと、次のように厳しく言った。「お嬢さん、そういう猜疑心はそれがもう少しふさわしい場面にとっておくことをお勧めします」

その日の午前中、大佐がまだ娘と一緒に食堂にいるのを見た。彼によると、ファーゴ教授は応接室で霊をダース単位で呼び出しているということだった。少し間をおいて大佐は怒ったように笑った。それはまるで抑圧した苛立ちが普段以上の苦痛を彼にもたらすかのようだった。彼はそわそわとした足取りで、つつましいパイプをふかしながら、ゆっくりと部屋の中を行ったり来たりしていた。失礼だとは思ったが、私は大佐に高価な葉巻を勧めた。大佐が感激して葉巻を吹かしている間に、妙な相手とチームを組んでいることを正当化する必要性が彼の中でゆっくりと力を増してきた。「あなたにこの話ができて私にとっても満足です」と、自分の言葉を聞く悦びに輝く目で私を見ながらとうとう彼は言った。「私とファーゴ教授の関係は」ここで一瞬彼は間を置いた。「彼の異常な自惚れを知的に認めたということの意味するのではないのです。このことはもちろんここだけの話ですが、あなたはまったくの他人です。そのあなたに胸の内を打ち明けるのは軽率の極みであることは明らかです。私の生活は彼と喧嘩しないとい

うことにかかっています。彼の客の信頼—— ご存じのように、あとで報いを受けるのが当然であるような信頼ですが——」(こう言って彼は広間の扉に向けて首を振った)「を私が毀損しようとしていることをあなたが彼に繰り返せば、彼は必ずこのチームを解消し、生きていくために私はまた大海をさまようことになるでしょう。そうなれば再び正直者になった感じがするかもしれませんが、その一方で、恐らく飢えることになるでしょう。逆境というものは」彼は苦々しく続けた。「奇妙な人間関係をもたらすものなんです。私は不幸でした！」

この発言には重苦しい意味が大量に込められていたので、彼は一体誰で何者なのか率直に尋ねてみた。しばらくのあいだ質問には答えずに彼は懸命に葉巻を吸っていた。そしてとうとう老いて深く皺の寄った顔を煙の中で私に向けた。「私は気が狂っているんです。幻想を食べて生き、決して現実になることのない野望を抱いて生きてきたのです。心配しないで下さい。あなたを引き止めるつもりはありません。しかし、静かでわずかな関心をそれに向けてくれれば——私は信じているのです——それだけ世界が幸せになるような計画が私の頭の中にはいっぱい詰まっています。私は発明家です。そして意味のある計画を持つすべての発明家がそうであるように、私のこの特殊な考えは、誤り導かれた世界の救いとなるのです。私は多くのことについて詳細に調べてきました。しかし、最も新しい楽しみは、昨晚その一部を披露した計算システムなんです。まったく理解できなかつたと思いますが、非常に美しいものであることは請け合います。偏見を持たずに耳を貸していただき、じっくり宣伝して採用されれば、悩み苦しむ人類を大量の不快な労働から解放することができるのです。アメリカだけでも、私は計算してみたのですが、十年間にビジネス界で約二万三千時間を節約できるのです。もし時間が金であるのなら、それらの時間は節約する価値があります。ああ、また始めてしまいました。私に自分のことを話させてはいけません。私自身が考えそのものなんです！」

しかし、少しいねいな質問をすることで、彼がどういう人物なのかもう少し直接的で多くの事実を引き出すことができた。大佐という肩書は、市民軍に参加したことによるあまりばつとしない業績によって手に入れたようで、ファーゴ教授の公演の際に、聴衆の感心を得るために言及されるだけだった。それは全体的な詐欺の一部だった。その詐欺とは、健全な真実——それを無視することそれ自体が罰になるような真実——に耳を傾けるように人々をそそのかす試みであった。「私には常に科学的な研究に対する情熱がありました。そして、世の中が無意味だと言った実験に財産を費やしてきたのです。それは不思議で、美しく、神聖なものでした！しかしそれは誰の粉ひき機を回すこともなければ、誰のとうもろこしをすりつぶすこともなかったのです。私は現代社会にまぎれ込んだ中世の錬金術師のように扱われました。化学、物理学、数学、言語学、医学——それらをすべて深く掘り下げました。それら一つ一つに私の日々を順番に捧げた情熱でした。しかしどうやら私にはアイデアを支持してもらう技術——それを人々に飲んでもらえるように甘くする技術——が欠けていたようです。そしてここに私がいます。これまでのすべての徹夜や冒険の結果です。財産を失い、健康を損ない、悲しくも希望を

失ったおちぶれた老人というわけです。机を回したり霊を呼び出したりする男と同じボートの中で、漕ぎながら必死に浮かんでいようとしているのです。私には誇りがあります。私は精密科学の熱愛者なのです。あなたには私が何に苦しんでいるか想像できるでしょう。かわいそうな娘の障害を詐欺師の屋台で私が利用することになるなんて十年前は想像もできませんでした」

父が話している間、その若い娘は何か言いたげな驚いた表情で父を見つめていた。その表情から、大佐がこのように饒舌になるのはめったにないことなのだと私は推測した。父はどんなに長いお話をしているのかしらと彼女は思った。大佐が娘のことに触れたとき、私は彼女の方をちらっと見た。それに気づいた彼女は少し顔を赤らめ目をそらした。その仕草は、見られることに無関心だと思っていた彼女の性格と相容れないように思えた。「当然なんです」と彼は言った。「障害を持った人間とふつつ接する以上にあの娘にやさしくするのは。結婚してしばらくの間、私は関心のある一連の化学的な研究をしていました。妻はとても美しい女性でした。服をかさかさ引きずって、ひょこひょこやってきては実験室をうろろろしていました。あちこち覗き込んで、あたりを引っかき回し、瓶のふたを開けて異臭に顔をしかめ、こっけいで罪のない質問をしていました。ある日、まだ彼女が部屋にいる間、日光で乾かすためにバルコニーに置いたものを調べに外に出ました。突然、恐ろしい爆発音が聞こえました。その爆発で窓ガラスは粉々に砕け散っていました。慌てて部屋に戻ると、妻は床の上で気を失っていました。あまりにも長時間化合物を温め過ぎていたのです。私は物質の性質を過小評価していました。妻には目に見える傷はなかったのですが、意識が戻ったとき、彼女は耳が聞こえないことに気がつきました。聴覚は二度と戻ってきませんでした。それからしばらくして娘が生まれました——聴覚に障害を持ったその娘です。私は妻を亡くし、化学をあきらめました。歳をとるにつれて、私の情熱を支配するものは数学であることを確信するようになりました。私は数学にのめり込みました。数学は人間の精神が獲得した最も高貴な成果だと考えています。それについて深遠で独創的な知見を得たと言うことに私はためらいを感じません。もしあなたにそれを理解する能力がありなら、広々とした視界が得られるようにしてあげることもできます。しかし、あなたにはそういう能力がありそうにない！ああ、時代は絶望的なまでに知性が劣化しています。世界は深く考え抜かれた思想を恐れているのです。薬を甘いもので覆い、すべてを分かりやすくして欲しいのです。数字による永遠の科学の神聖なる調和より、あなたと私が昨晚経験したような恥知らずで愚かな知性の欠如を好むのです。だから私は物乞いをしなければならないのです。ぶつぶつと情けなく哀願し、はした金を得るために娘を見世物にしているのです。ですから私は低俗な詐欺師とチームを組まなければならないのです。ここにくるまでは長い道のりでしたが、今ではどっぷりと浸かっています。私がどのようにして挫折から挫折、失敗から失敗、先延ばしされた希望と否定された正義をとおしてついにここまでおちぶれたか、あなたにお話するつもりはありません。そんなことをしても、あなたの同情と人の良さに過重な負担をかけるだけです。人間のどうしようもない愚かさ、決められた習慣という鉛の帝国について

話してもあなたには到底信じられないでしょう。私は財産を失いました。それは認めます。しかし低俗な失い方ではありません。それは高度な研究の連続であり、長きにわたる実験の放蕩の結果です。焼けつくような高炉の中で最後の一セントを溶かし終えたとき、結果に対して世間は喜んで何がしかのものを私に払うかもしれないと考えていました。ところが世間には、最高の真実を購入するよりもより良い金の使い途があったのです！私はセールスマンになりました。定式化された二十個の素晴らしい計画を提供しながら、家を一軒いっけん回りました。その中の最も取るに足りないものでもそこには平和な革命の芽が含まれていたのです。日の目を見ることのないそれらの気の毒な構想は今二階に置いてあるトランクの中にすべて放り込まれています。その困難の最中、自分の娘が天才であるという言葉にできないような喜びを発見しました。なぜそれが喜びでなければならなかったのか分かりません。彼女の気の毒な父親の才能が私の前に警告として立っていました。しかし、音のない世界に閉じ込められた彼女の精神が空白でないことを知るの楽しいことでした。彼女は数に対する情熱を私から受け継いでいたのです。私の愚かさは貴重な能力を彼女から奪い取っていました。しかし、別の能力を彼女にもたらしっていたのです。高い確率で彼女が完璧な存在になることは分かっていました。彼女の才能は女性の中では珍しいものですが、平凡な女性らしいものが彼女には欠けています。彼女はとても単純なんです——ある意味では妙な単純さです。ペティコートについて女性に話しかけられたこともなければ、恋愛について男性から話しかけられたこともありません。彼女は考えないんです。数字に対する彼女の技術は一種の直観なんです。ある日、講演をして生きていこうという考えが頭に浮かびました。満員の会場で多弁に話している人の話を聞いたことがあります。彼には私より話すことが少なかったと思います。それで私も演説をして回りました。聞いている人は二十人のときもありましたし、五人のときもありましたし、まったくいないときもありました。ある朝、六ヶ月くらい前のことですが、彼がそこに待っていたのです。彼の講演が本来持つはずの猛烈な力を発揮していないのだと彼は率直に私に言いました。そして見るところ、私の話も多くの人々の耳に届いていないようなので、二人で力を合わせて人気をかっさらおうと提案してきました。彼の公演だけでは心もとなく、私の講演だけではあるべき一貫性が欠けているが、二つ合わせれば効果的な化合物ができ上がるということでした。そのとき私のポケットには五ドルしかありませんでした。私は、太陽が地球の周りを回っているということを信じないように、霊的なものなんて信じていませんでしたが、生きていかなければならないので取引をすることにしました。それはとても不利な取引でしたが、そのおかげで生きていくことができました。ファーゴ教授からいくつかヒントを得て、幸運をもたらす定式を少しばかり改善しました。それでも、私たちの客はまばらでした。私にはいかさまをすることができなかったのです。それは私に欠けている能力だと思います。ついに教授は、私が金のガチョウを所有していることに目をつけました。いかさま師からすると、黒板の上で奇跡を起こす聴覚障害の可愛い女性は、現実的な考え方をする人にとっては宝も同然だと考えたのだと

思います。しかし、気の毒な娘を引きずり出し、哀れな個人的特徴を世間の目にさらすことは私にとっては不愉快の極みでした。しかし教授は娘の前で事情を説明し、二週間後、『電光石火の計算機』として教授の舞台に登場する覚悟ができていと娘は教授に伝えました。私は彼女にやらせてみることに同意し、ご覧のとおり、彼女は成功を収めたのです。猛烈にというわけではありませんが、彼女は十分客を集め、私たちは何とか生きてこれたのです」

三十分後、顔を紅潮させ、髪をぼさぼさにし、手をこすり合わせながら、明らかに上機嫌で教授が戻ってきた。大佐は急に静かになり、表情も重々しく質問もしなかった。しばらくして食事が運ばれてきたときも、すべてを断って憂鬱そうにまゆを寄せてじっと自分の皿を見つめていた。

大佐にとって教授は明らかに悩みの種だった。一方私は、教授にとって大佐はどのような存在なのか知りたかった。そしてすぐに、大佐の意味ありげな沈黙の影響が及ぶ範囲内では、教授もいつもの上機嫌なお調子者ではないことを発見した。仮に二人の間にほとんど好意がないとしても、少なくとも、パートナーに対する説明し難い敬意によって教授のいつもの饒舌はなりを潜めていた。確かに大佐は愚か者だった。自分の発言には慎重で、人間のだまされやすい性質についてユーモアのある見方ができなかった。しかし、ある意味で彼は尊敬すべき愚か者だった。一方教授には、多少もどかしくも二人の間に介在する空間がもたらすインスピレーションがなく、真実に対する大理石の記念碑のように座っている青ざめた表情の年老いたまじめな数学者のそばでは、持ち前のたわごとを発揮する勇気はなかった。しかしこの件では、教授は大佐の無言の抵抗を顔をしかめて飲み込んだ。暗い休憩室で教授が何をしたのか分からない。何をしたとしても、それは自分の能力に対する教授の自信を心地良く刺激した。さらに食事の席で、大佐ほどひどく懐疑的ではない六人ばかりの旅行者と私たちは一緒だった。このような状況で自分のすぐれた才能を披露せずにいることは教授には極めて困難だった。放電されない電気が空気に溜まっていた。

午後には雨が上がり、突然陽が射し、村の通りの何千もの水たまりを太陽が照らしていた。宿の玄関下で大佐が膝の間に村の子どもをはさんで座っていた。彼はその子どもに数学の初歩を教えているようだった。少年の額は出っ張っていて、無数のそばかすがあり、全体として子どものニュートンという雰囲気があった。大佐の講義を聞いてもっと知りたいという健全な好奇心に火がついた。教授が宿で講義をしてくれるということを知り、それなら大佐も同じようにしてくれるだろうと信じてやってきたのだった。体は大きい痩せていて、黄色い髭を顎に生やして、茶色い顔をした農夫である彼の父親がそばに立っていた。息子の厚かましさに顔を赤らめながら、その利発さに嬉しそうに相好を崩していた。気の毒な大佐は、世間に認知されるという報酬にまだ乏しかったので、幼い子どもの共感に非常に気を良くし、相手に合わせるようなわざとらしい態度でこの小さな神童に講義をしていた。間違いなく、少年が成長するにつれて想い出す子ども時代の最も鮮明な記憶は、白い口髭の下から聞こえてくる柔らかい声と

輝く目をした老人であろう。その声は丸々半時間少年を不動にし、そのあとで「君は小さなトロイの男だ」と保証する声だった。子どもへの講義が終わったとき、私は大佐を散歩に誘った。私たちは歩いて村から出ていった。午後も終わりに近づき、辺りの景色は美しかった。紫や銀色の光に覆われて船首を高くしたガレー船のように、ちぎれて離れ離れになった大きな雲が輝く空を航海していた。興奮して私のそばでおしゃべりをしている大佐のことを、そして、ごつごつした岩に座り、没む夕日を見ながらついに胸の内をたっぷりと打ち明けた大佐のことを私は決して忘れないだろう。

「そうです！」と彼は言った。「肉体と魂が一緒になければならないという恥ずべき必要性へのさもない譲歩なんです。ときどき、たとえ一時間でも耐えられないと感じるときがあります。このような犠牲を払って真実について語るのを聞いてもらうくらいなら、たとえ運命の命ずるところにしたがって溺れようとも、あの厚かましいペテン師と別れた方がましだと感じる時があります。黙って口を閉じ、あの男の卑劣な詐欺行為に対して少なくとも私は何の要求もしないと主張することで万事おさまっているのですが、彼と付き合っていること自体が制裁であり、あのいまましい見世物に参加していることが純粋な真実への冒瀆なのです。ご覧のとおり、私は不幸にも何かを信じてしまったのです。知ってしまったのです。そして知性に関しては、毒を含んだくずを口にするか、真の科学という熟した甘い果実を口にするかが重要であると考えているのです！私は毎晩目を閉じ、顎を固定し、歯を噛みしめているのです。しかしあの男のくだらない戯言を聞かざるを得ないのです。始めから終わりまで恥ずべき嘘の塊です。今ではもうすべて暗記してしまいました。立ち上がって私にもべらべらと話すことができます。それは一日中私の耳で鳴り響いています。長い布きれをかぶせたテーブルの下に屈み込んでテーブルを叩いている恐ろしい夢を見るのです。外に教授が立っていて聴衆に向かって『これはアルキメデスの霊です』と言うのです。そして、私は息苦しくなってテーブルをひっくり返し千人もの人の前に詐欺師の共犯者として登場するのです。私の無視された人類へのメッセージの価値があまりにも大きく、あまりにも計り知れないので、私がそれを口にするのを可能にする手段は正当だと信じている瞬間があります。黄金の島に向かって航海するときは、力を誇示する海賊がその船を大洋に引っぱっていてもかまわないのです。そのような気分で、目をつぶって聞かないようにしながら壁にもたれて陰に座っているときは、本当に聞こえないのです！私の心ははるか遠いところにあるのです——空中に浮かび、発明の翼に乗って高く舞い上がっているのです。しかし突然、忌まわしい現実が私に襲いかかるのですが、ここに座っているのが本当の私——山のような黄金よりも一粒の科学的真理が貴重だと考えている私——だという自分の感覚が信じられなくなるのです！」

彼は長い間黙っていた。彼をどう慰めればいいのか私にも分からなかった。何かできたとなれば、彼のわだかまりを最後の一滴まで吐き出させることができたということだろう。「しかし、さらに辛いことがあるんです」しばらくして彼は再び話し始めた。「もっと辛いのは、あの

脂ぎったろくでなしが娘に近づくのに耐えられないということです。こういう風に生活し移動をしていると、奴から離れることがないのです。当初、折りたたんだ小さな紙を彼に見せるために小さな女の子をあらかじめ雇っていたんです。しかし数週間前、私の娘にそれをさせると公演にさらに真実味がでると考えたんです。そしてそのとおりだったんです。効果は抜群でした。私はひどく落ち込んで毎晩座ってそれに耐えています。何か悪意があるなんて娘の方は夢にも思いません。教授を神のお告げだと思い、彼の講義を最高だと思っているのです。私は彼女の目を覚まさせるようなことはしませんでした。というのも、偽りや不道德のようなものがあるということを教える気はないからです。絶え間ない列車の旅がひどい頭痛を彼女にもたらすことを除けば、私たちは純粹に楽しい生活をしていると彼女は思っています。しかしいつか晴れた日に、彼が娘にピンクのドレスを着せ造花で飾りたいと言ったら、私は何としてでも彼とたもとを分かつつもりです！」

この最後の訴えに対する私の沈黙は、私もまったく同感であることを示していた。しかし私が密かに思ったのは、「この小さな娘」が、大佐が考えているように本当に邪悪なものに対してそこまで完全に無垢なのかどうかということだった。私は一昨日の墓地での出来事を思い出し、大佐があれを容認することができたかどうかは大いに疑問だった。教授にたいする彼の心情を考えると、それはもっともありそうにないことだった。ということは、この若い娘には秘密があるということであり、その娘の秘密に対する鍵を握っているのはあの下劣な男だと考えると気分が悪くなった。気の毒な大佐は自分が思っている以上に残酷に自分の仲間と関わってしまっているのだ。宿に戻ったとたん、この印象はよりはっきりと確かめられた。私たちがラウンジに入ったとき日はすっかり暮れており、部屋に広がった灰色の光の中で、一つの窓のそばにいた二人が一瞬誰なのか分からなかった。次の瞬間、そのうちの一人が前に進み出て、「散歩は楽しめましたかな」というファーゴ教授のよく響く声が聞こえた。大佐はどきっとして前を見つめ、答えるのは私に任せた。

彼がどしっとソファに腰を下ろすと、娘がやってきてそばに座り、彼の膝の上にやさしく手を置いた。大佐はそれをそのままにしておき、熱くなった頭を杖の上に置きじっと動かずにいた。教授はすぐに退室した。しかしその歩き方は、大佐の侮辱に対して仕返しをすることができる根拠があるのだと告げているように私には思われた。

その日の夜遅く、再び階下に降りて廊下を歩いているとき、ファーゴ教授がバーで熱心に演説しているのが聞こえてきた。明らかに彼の話の聴いている人がいるのだ。恐らくそれは不思議な光景だろう。近づいてみると、その才能ある男は立ち上がって、P町の陽気な人たちの集まりに向かって話していた。大きく伸ばした片手でウィスキーの水割りや煙草を振りかざし、もう片方の手でよく響く自分の台詞に抑揚をつけていた。明らかに彼はたっぷりと飲んでいて、未来を預言する能力でさえ朦朧とすることがあるのを私は見た。その日は彼にとって素晴らしい一日だった。幸運の女神が微笑み、力が漲るのを彼は感じていた。程度の差はさまざまだが、

一ダースばかりののんびりとした田舎者たちが黙ってまじめに彼の話を聴いていた。それは信仰という面もあるが、明らかにラム酒のせいでもあった。隅の離れたところで、中身の入ったグラスを前に持って大佐が座っていた。私が部屋に入ると、教授は素晴らしく上機嫌で手を振り、再び演説を始めた。

「皆さん」と彼は叫んだ。「私が主に大切だと考えているのは、亡くなった人々に及ぼす私の特異な影響力ではないのです。というも、結局のところ、幽霊は幽霊です。いずれにせよ大したことはできないのです。触ることはできないし、一日のうち半分は見えないのです。もしそれが小さい娘の霊だったら、気がおかしくなってしまうでしょう。大切なことは、それが生きているものに不思議な影響を与えることができるということです。皆さんはそれを目を使ってすることができますし、声を使ってすることができますし、ある種の手の動きですることもできます——ここまで皆さんがご覧になったように。ただそれに心を向けるだけで何も使わなくてもできるのです。もちろんそれは、できる人がいるということです。あまり多くはいません——皆さんがときどき出会うある種のお金持ち、権力を持った人、共感する力の強い人たちです。それは磁力と呼ばれます。それについてはさまざまなことが書かれました。さまざまな説明の試みもありました。しかし大した成果をもたらしませんでした。言えることはただそれが磁力ということであって、人はそれを持っているか持っていないかのどちらかなのです。神はそれを私に授けることを適切だとお考えになったのです。これは大きな責任ですが、私はそれを正しく使うつもりでいます。私はあらゆる類のことができます。何かを見つけ出すこともできますし、人が心の中で思っていることを語らせることもできます。人を病に伏せることもできますし、健康にすることもできます。恋をさせることもできます——どうです？再び恋から目を覚まさせることもできます。そして、割に合わなければ、もう二度と好きな人と結婚なんてしないと誓わせることもできるのです。正直に言いますが、どういう風にそれをするのかは皆さんにお話しすることはできません。ただ自分に『さあ教授、これを治そう、あれを治そう』と言うだけでいいんです。ただで与えられた才能なのです。つまり、磁力ということです。それを動物的磁力と呼ぶ人もありますが、私はそれを霊的磁力と呼んでいるのです」

深い沈黙があった。演説におけるあの気まぐれな停滞にその場の空気は充満していた。それは、アメリカの社交性によく見かける現象である。私は大佐を斜めに見た。表情はいつもより青ざめており、目は実に猛々しく見えた。ファーゴ教授はグラスに再度飲み物を満たすためにバーの方に振り向いた。大佐がゆっくりと立ち上がり、部屋の中央に進み出て、その場にいる人を見回した。明らかに何か言おうとしていたが、しばらく黙って立っていた。彼が興奮して震えているのが分かった。「皆さんはこの男性が話したことをお聞きになりましたね？」と大佐は話し始めた。「理解できましたか？とは言いません。それは理解できるようなものではないのです。昨晚、ファーゴ教授が話している間、舞台の上で座っている私をご覧になった方もおられるかもしれません。ご覧のとおり、私たちはパートナーです——便宜上一緒に仕事をし

ています。ですから、教授がたった今話した教義に私も同意見だと思わないで下さいとはなかなか言えないのです。『教義』とはなかなかいい名前ですが、私は科学の名においてお話しします。科学は『霊的磁場』というようなものを認めません。神秘的陶醉状態や霊的交信、降霊というようなものを認めないのです。私には良心にかけてそう語る義務があるのです。この男性があのような恐ろしい話で締めくくろうとしているときに、じっと黙って座っている皆さんを見ながらここに座っているわけにはいかないのです。このようなお話をするのは気がひけますが、知性のある方ならば、男性であろうと女性であろうと子どもであろうと、ファーゴ教授の超自然的な意思の働きによって、自分の意思に反して何かをさせられるのではないかと恐れる必要はないのです」

ファーゴ教授の熱弁のあとに沈黙が続いたとしたら、大佐の発言に対して聞こえてくるような反応がないことについては何と云えばいいのだろうか？教授のような頭の良い人物がどのような行動にでるか見てみたいという強烈な好奇心——私自身それを感じた——があった。対決姿勢を鮮明にしてしまったので、攻撃を受ける態勢を整えるかのように大佐は額を拭った。表面的な素晴らしい愛想の良さを示す微笑みを浮かべ、片方に首をかしげて教授は大佐を見た。「ああ、君」と彼は叫んだ。「思っていたことを口にしてくれて嬉しいよ。君が話したそうにしていることは分かっていたよ。これで気分が良くなったのならいいのだが。もし君さえよければ、議論の中身には入らないでおこう。内輪もめは人に見せるべきではないからね。そう言ったのはジョージ・ワシントンだったかな。君は僕の言うことを保証してくれないんだね——いいだろう。もし君が礼儀正しい紳士でなかったら、僕の演説を、一言で、やぶ医者のでたらめだと言いたいところなのは分かっているよ。しかし、僕も一言でそれを否定しよう。君は磁場の力の存在を否定するが、私は答えよう。僕は個人的にそれを所有し、もう少し時間をくれるなら、そこには何かがあると君に言わせてみせよう、と。私には何かができるのだと言わせてみせよう。ここにおられる皆さんはすべてを目にすることはできません。しかし少なくとも、皆さんは私の約束をお聞きになることはできます。君に証拠を見せると約束しよう。君が事実にしたがうと言うのなら、事実をお見せしよう。ただ、ここにおられる皆さんの前で、君に『事実を十分に考慮する』と言ってもらいたいのだ！」

額を拭いながら大佐はじっと立っていた。教授によって表明された事実というものの性格について、大佐は私ほどにも想像することができなかった。しかしもちろん、一つ答えることはできた。教授とその場にいる人々に大佐は重々しくお辞儀をした。「まっとうな証拠を私が検討しないなんてことはあり得ません」と彼は言った。しばらくして彼はつけ加えた。「私の先入観にどのような犠牲が払われることになろうとも」

Ⅲ

信念にもとづいた大佐の控えめな態度に心理的な好印象を感じ、私は大佐の個人的な状況に深く関心を持った。翌日、お別れの挨拶をしているとき——その「一団」のことはすでに隣町で話題になっていた——大佐の心の中で傷ついたことが時間の経過とともに癒されることを心から願った。しかし大佐は悲しそうに首を振り、彼には時間がもう残されていないと答えた。

それから六週間の間、大佐のことをよく思い出したが、彼から便りはなかった。その間、決まりきった語りが大いに要求される仕事で、町から町を移動する忙しい生活を私も送っていた。社会の再生が私の売る商品を受け入れることにかかっていると言うつもりはないが、正しく評価されない営業マンとしての大佐の経験にかなり共感していた。冬の初めに私はニューヨークにいた。ある日の夕方、さびれた通りをぶらぶらしていると、ガス燈の光の中で、入口のそばのポスターにファーゴ教授の名前とその経歴が書かれているのを発見した。私はすぐに立ち止まって、その謳い文句を読んだ。P町での黄色いチラシよりもさらに仰々しいものだった。というのも、大都会での期待を上回るためには、かなりの高度まで登らなければならないからだ。「一団」はまだ続いていた。そして、最後にギフォード大佐の名前があった。極めて装飾的に大佐の娘が単独で紹介されているのを見て興味深く思った。扉の上に青いランプがあり、ランプの下には「エクセルシオール・ホール」と記されていた。誰も入っていかなかったが、私がそこに立っていると、白いオーバーコートを着た若い男性が目深にかぶった帽子を鼻にのせて出てきた。彼は無意識にあくびをすると、横柄な態度で入口のところに立ち止まった。気の毒に大佐は聴衆を一人失ったのだ。私は彼の代わりを務めなければならないと決心した。料金を払って中に入ると、客がまばらなことが分かった。数にして二十を超えないわずかな人のグループは、外にはられたポスターが語ることはかなり違っていった。そこには「ファーゴ教授の公演は趣味の良い都会の知識人であふれている」と語られていたのだ。教授が手持ちの奇跡を舞台の上で展開していた。P町のときと同じように、教授の後ろに大佐と大佐の娘が座っていた。明らかに教授は圧倒的多数を占める空席に意気消沈しており、自らの啓示を熱意もなく実演していた。失望のために彼は残酷になっていた。動きは鈍く品がなく乱暴だった。台詞を言い間違い、名前の書かれた折りたたんだ紙を帽子に入れるとき、一回以上推測を誤った。額にはむっつりとした意地の悪い気分が表れており、それが我慢強く辛抱している彼の仲間の憂鬱な表情を深めているようだった。私は友人のために気を揉んだ。大佐は教授との契約が不公平なものであると言っていた。P町でのように「一団」に運が回ってきたときでも大佐の取り分は少なく、今回のように運に見離されたときは加重なペナルティーを払っているに違いないと思った。節約のために薄暗くなっているホールの扉近くに座った。出演者に見つかることを恐れたからだ。あれほど抜け目のない男であるにもかかわらず、教授が明らかに投げやりだった事実には私は少し戸惑った。公演が拍手のない終わりを迎えたとき、アシスタントに代わっ

ていつも彼がするスピーチはせずに、観客に向かって大きく口を開け、どっしりと椅子に腰を下ろした。しかし大佐は、短い間のあと、その難局に挑んだ——というより、堂々とした態度でそういう状況に身を置いた——そして、わずかばかりの観客（その半分は寝ていた）に向かって、まるで彼らが知性と流行の代表であるかのように話しかけた。彼の話し方は古かったとしても、彼の話す内容は新しかった。彼にはアイデアがあまりにもたくさんあり、同じことを繰り返すということがなかった。彼が説明しようとしているアイデアは軽薄な私の理解力を超えていたが、掛け値のない彼の豊かなインスピレーションによって、独創的な才能に対する彼の主張が正当なものであることを私は半ば確信した。P町での無反応な知性に対する彼の訴えに何か恐ろしく悲しいものがあったとしたら、「エクセルシオール・ホール」の陰気な空虚感を相手にしている彼を座って見ていることは、ほとんど耐え難いまでに私を惨めな気持ちにした。ギフォード嬢が前に出てきたとき、寝ている人は目を覚まし、少なくとも寝返りを打った。彼女はまだピンクのドレスを着たり造花の装飾を身にまったりはしていなかったが、あちこちにそれらの兆しが芽生えているように見えた。首の回りにはひだ飾りが飾られ、黒いドレスに色つきの帯を締め、髪には巻き毛がいくつも見られた。しかし、彼女の態度はこれまでどおり子どもっぽく、質素で落ち着いたものだった。空席は彼女には否定的な意味を持っていなかった。

正直に言うと、友人に対する個人的な関心にもかかわらず公演がひどく長く感じられ、一度ならず、もう少しで席を立ち公演が終わるのを外で待とうとした。しかし、立ち去る客の姿を見せて気の毒な大佐を悲しませる勇気はなかった。仲間の二十人の観客がのろのろと立ち去ったあと、私は舞台に近づき三人と旧交を温めた。教授はよそよそしくうなずき、大佐は再会を心から喜んでいるようだった。大佐の娘にお辞儀をしたとき、彼女はいつも以上にはっきりとした率直さでじっと見つめた。私が再び現れたことが三人にとってどういう意味があるのかを考えているようだった。それはまず始めに滞在先の宿に翌日大佐を私が訪問するということを意味していた。そこは恐ろしく質素な宿だったが、人をもてなすという古くからの習慣を彼が持っていることを示す礼儀正しきで私は迎えられた。最近「一団」の業績はあまりかんばしくないことを彼は正直に認めた。しかしそれは、事態を直視し、どうしようもない現実であることを認める悲観的な冷静さをともなっていた。彼らは全国を回っており、その成果はさまざまだった。運の悪いことに、彼らの公演の直前にサーカスが開催されていた。彼らの演目が大量の感嘆符に囲まれてあふれていたとしても、ゴージャスで生き生きとしたサーカスのポスターの横では、情けないほどに目立たなかった。「訓練された象や女性による空中ブランコのあとで、娘と私に何ができるというのです？あの教授でさえ、偉大なアメリカの道化師のあとでは何ができるというのです？」と大佐は言った。しかし、彼らはそこそこ利益を上げていた。もし小さな町での成功で満足していたら、もっと利益を上げていただろう。ところが教授は、反対したにもかかわらず突然ニューヨークに向かった。そしてニューヨークが彼らにもたらした

ものを私は昨晚見たというわけだ。最後の六回ばかりの公演は部屋代とガソリン代にもならなかった。契約によってあと五回は公演をすることになっているが、この五回が済んだらチームを解散するつもりだと大佐は言った。都会に行こうと教授が主張したとき、彼から抜け目なさが失われつつある兆しがあった。彼から抜け目なさが失われたらいったい何が残るといのです？ 自分は何をすればいいのか、大佐自身はまったく何も思いつかなかった。「最悪の場合」と彼は言った。「娘は施設に行くことになるでしょう。私は救貧院に行きます」約束したように「霊的磁場」の証拠を教授は見せたのかどうか尋ねたとき、大佐は驚いたようにこちらを見つめ、彼を納得させてやると言った教授の約束のことはすっかり忘れていたようだった。「ああ、あれは見逃してやりました」と首を振りながら大佐は言った。「その約束をしたとき、彼は酔っ払っていたでしょう。そのことについて彼が何か言うとは思いません」

私は忙しかったし、悲しそうな高齢の男性は陰気な話し相手だった。しかし、彼の人柄と運命には哀しみ漂う関心をとても持っていたので、彼を訪問する機会を何度も見つけた。憂鬱な自意識と父親としての心配から気分を紛らわすことができ、彼は明らかに感謝していた。そして、自らが陥ったどうしようもない諦めからいったん奮い立つと、実現不可能な大量の自らの理論について詳しく話せる機会を心から楽しんだ。大抵の場合、彼の話す内容は私にはまったく分からなかった。しかし私は話を聞き同意し称賛した。純粋な知的情熱の魅力を感じた。彼が極めて貴重な考えをいくつか考案していたと信じたい気持ちになった。私たちは人で混み合った通りを長い間散歩に出た。細身に青白い表情であるにもかかわらず大佐は疲れを知らない人物だった。歩幅は広く、外出中の半分は高い調子の震える大きな声で話しながら歩いていたので、ブロードウェイの下手の先を急いでいる歩行者でさえ、歩調を緩めて振り返って彼を見た。混み合った人通りが奇妙な気分の高揚を彼にもたらし、大都市の力強い人のざわめきで心臓の鼓動が速くなり胸が痛くなるほどだと彼は言った。一度ならず、縁石の端や交差点の中央で急に立ち止まったかと思うと、私の腕に手を置き、白い眉毛の下の深い輝きとともに、超越的な思索について一種の狂想曲を突然語り出した。「もし彼らさえそうさせてくれるのなら、私が働きたいのはこれら何百万人もの人たちのためなのです！」彼は叫んだ。「偉大な都市生活なのです。私の構想が対象にしているのは、もう引退してゆっくりしていい年齢であるにもかかわらず自分の考えを声高に訴えるのは、何百万もの人をより賢明に、より善良にしたいからなんです」ある日、大佐は口数が少なく何かに気を取られているようだった。いつものように話すわけではなく、周囲に関心を払わず、歩道に視線を落として歩いていた。彼がよく使うので私にもすっかりお馴染みとなった言い方をすると、そのつるつるとした手触りにもかかわらず彼はある着想を得て、その尻尾をしっかりとつかんでいるのではないかと思った。散歩を終え宿に近づいたとき、通りの真ん中で彼が不意に立ち止まったので、カタカタと走ってきた肉屋の荷馬車にひかれないよう私は彼を強く引っ張らなければならなかった。歩道に戻ったとき、彼は再び立ち止まり、私の手をつかみ、非常に高揚してじっと見つめた。私たちは彼の宿があ

るさびれた裏通りの入口にいた。むさ苦しい家屋が私たちの前に並んでいた。アイルランド人の浮浪児が家の入口と溝の間で六人ばかり私たちの足もとで寝そべっていた。「分かった！分かった！」彼は叫んだ。「分かりました——分かりました！」「何が分かったのですか？」という問いに対して、彼は次のように答えた。「科学が長年にわたって探し求めてきたものです——測り知れないものに対する解答です！おそらく、私の運命でもあります。間違いなく私の永遠の生命です！急いで、急いで！消え失せてしまう前に書きとめなければなりません」そして彼の薄汚い宿に私を急がせた。戸口で彼は立ち止まった。「今は話すことができません」と彼は叫んだ。「まず書きとめなければならぬのです。しかし、今晚公演を聞きにきて下さい。最初のひらめきがやってきたとき、私は一気にお話しすることができますと思います」公演には必ず行くと約束した。そのとき、大佐の部屋の窓から不吉なファーゴ教授の顔が見えた。それまで私は大佐の情熱で興奮していたが、教授の出現で体からさっと熱が引いた。大佐の突然のひらめきは素晴らしいものであったかもしれないが、自分の宿の屋根の下で同僚に会ったというショックのせいで、せっかくのひらめきをつかみ損なうのではないかと心配した。一瞬彼をそのままの姿勢にしておくための口実を見つけ、教授の姿が見えなくなってしまうのを待った。次の瞬間扉が開き教授が入ってきた。彼は急いで帽子をかぶったのだろう。ふんぞり返った彼のいつもの歩き方の究極の形のように勢いよく一方に傾いていた。エクセルシオール・ホールするときよりも明らかに彼は上機嫌だった。しかし、教授の微笑もしかめ面も正直者のそれではなかった。大佐と私に極めて寛容な微笑を向け、反対の方向に帽子を傾け、前をとおり過ぎようとした。しかし、彼は突然思い直して立ち止まり、ポケットから黄色い小さなチケットを取り出して私によこした。エクセルシオール・ホールの入場券だった。

「今晚これを使えば」と彼は言った。「めったに見られないものが見られると思うが」何かを深く暗示するようなウィンクをともなったこの発言は、教授もまた、奇妙な偶然によって芸術的なひらめきを得たことを示しているように思えた。しかしそれ以上何も言わずに、急いで彼は出ていった。お休みの握手を大佐としたとき、娘への教授の用向きに対する怒りに満ちた関心の中で、新しい着想の光が消えてしまっていることが分かった。

その夜、例外的に早く私をエクセルシオール・ホールへ向かわせた漠然とした懸念を説明することはできない。私が到着したとき、そこにはまだ誰もいなかった。そしてその状態は三十分続いた。ついに、粗末な服を着た小さな男性が入ってきて、陰になった一番後ろの席に座った。誰も座っていない出演者の三つの椅子の背後にある白い壁を見つめて、ガス燈の音を聞きながら私たちは座っていた。この状況を考えると、勢いよく燃えるガス燈のシューシューという音はとても私たちの気を減入らせた。もう一人の男はついに席を立ち、通路をぶらぶら歩いてきた。舞台の前で立ち止まると振り返り、客の入りを調べて、うめき声とも罵り声ともつかない声を発した。それから彼は私のところにやってきて立ち止まった。シャツの前は汚れており、顎髭は伸び放題で、黒い小さな目は怒りに満ち、明らかにユダヤ人を思わせる鼻をしていた。

「たった一人で公演を聞くことになるのが嫌なら出ていった方がいいと思いますよ」と彼は言った。

まだ誰かくる可能性はあるし、自分はこの公演に特別な関心があるので、いずれにせよ、このまま座っていますと私は答えた。

「特別な関心だって？」彼は大声で言った。「それこそ私が持っているものですよ。徴収しなきゃいけない部屋代があるんです。もう三週間も続いているのに、私の取り分の最初のードルもまだ手にしていないんです。この公演の客の入りは着実に減ってきています。教授と大佐と聴覚障害のあるあの若い女性は公演を終了した方がいいのです。彼らはあまりよく理解されていません。何か別の線を考えて方がいいですよ。いずれにせよ、この公演にはほとんど何もありません。人気がある公演と言えるものではないんです。カナダ人大女から一ヶ月間会場を貸して欲しいという申し出を受けているんです。今の一団には即金で支払ってもらって出ていってもらつつもりです」

明らかにこの「一団」は契約を履行するのが困難なようだった。舞台の後ろの扉から何かを確かめるかのように教授の顔が現れたが、空っぽの会場との短い交感のあと、再び中に消えていった。しかしながら数分後、いつもの三人組が登場し、真面目な顔つきで舞台に座った。親指をベストに入れ、彼の明敏な知性にとって客が入るかどうかがこれ以上やきもきするのは、耐え難い努力を必要とするかのように足のつま先で床を叩いていた。大佐は床に視線を落とし、重々しい表情でじっと座っていた。娘は、いつもの無責任な落ち着きでもってあまりありがたくない空っぽの空間をじっと見つめていた。私はといえば、近づいてくる足音をもう十分ばかり聞いたあと、前のベンチの背中に肘をついて顔をうずめた。これ以上大佐を見ていることができなかった。ついに私の後ろで急ぐような足音が聞こえたので振り返ると、あの小柄なユダヤ人がベンチの上で立ち上がっていた。

「皆さん！」彼は大きな声で叫んだ。「その女性には話しかけているのではないのです。彼女は耳が聞こえないそうですね。最も多くの聴衆を持つ者に話す権利はあると思います。今夜のこのホールの収入はたった三十セントです。もちろん、もしここにおられる方が無料招待の方でなかったらということですが。三十セントでは今夜の経費は支払えないと考えても差し支えなからうかと思えます。ここにある灯りを少し落とした方がよさそうです。支払いの清算をすだけなら十分見えますから。支払いを済ませていただければ、私は、皆さんがここでなされるどんなことよりも嬉しいです。私は皆さんの公演の内容を評価したりはしません。それが素晴らしいものであることをまったく疑ってはおりませんが、この町に合わないことは明白です。あまりにも知的過ぎるのです。私は何か他のことを考えています——言ってもいいと思いますが、カナダ人の大女なんです。明日の昼の部がオープニングで、その舞台の下に支柱を入れたいんです。それで、皆さんはこちらの男性に入場料をお返しして、食事に行かれた方がいいと思うのです。でもその前に、合計九三ドル八七セントお支払い願います」

教授は顎髭をさわっており、大佐はじっとしていた。そのユダヤ人はベンチから降りて、請求書を片手に舞台の方に歩いてきた。私はすぐ彼のあとをついていった。

「われわれは落第者というわけだ」と教授が言った。「いいでしょう！がっかりなんぞしていません。私は現実的な人間でね。アイデアがあるんですよ。今から六ヶ月後には『アカデミー・オブ・ミュージック』を満員にしてみせましょう」それからちょっと間を置いて、自分の連れの方を見た。「ところで大佐、九三ドル八七セントあるかね？」

大佐はゆっくりと視線を上げて彼を見た。私はそのときの大佐の顔つきを決して忘れないだろう。

「まじめな話」一瞬たじろぎ、教授は続けた。「借金の半分は君にも責任がある。しかし、次の条件を飲んでくれるのなら、君の分も引き受けよう。頭の中には次の公演のためのアイデアがあるんだ。この男の言っていることは正しい。われわれはあまりにも知的に過ぎた。まあ、いいだろう！」そう言って、彼は空っぽのベンチを見てうなずいた。「今回のことで分かった。これからはセンセーショナルにやることにしよう。センセーショナルというのは」一瞬間を置いて彼は大佐の目を見た。すぐに大佐は漠然と教授を見上げた。「この若い娘だ！」そう言って彼は手をギフォード嬢に向けて差し出した。「君の娘を一ヶ月間、私の考えにもとづいて私のやり方で演出させてくれたまえ。そうすれば君の借金の半分は私が引き受けよう」

娘は視線を床に落としたが、自分の立場を理解していた。明らかに彼女はすでに仕込まれていたのだ。怒りに震え、にらみつけながら大佐はゆっくりと立ち上がった。私はその場を何とかしようとして、大佐の答えをさえぎった。「あなたの提案は無効です」と私は教授に言った。「大佐の借金は私が肩代わりします。この場でお支払いしましょう」

ファーゴ教授はあっけらかんと大喜びし、にやりとした。この申し出は大佐の同意よりさらに都合がよかったのだ。「君は同意しないんだね」教授は大佐を追及した。「私の手に完全に任せて演出することに」

「もちろんだ！」と大佐は大声で言った。

「しかし、君の娘は成人していることは分かっているね？」

次のようなうめき声とともに大佐は私を見た。「いったい、この男は何を企んでいるのだ？」

「この娘だよ！」と教授は答えた。そして、その若い娘を一瞬見つめた。彼女はすぐに彼を見上げて立ち上がり、前進して彼の前に立ち止まった。彼女の表情には自分の行動についての意識的な葛藤があるようには見えなかった。妙に単純な彼女の気分と性質の中で、彼女の意識はこの場においてどの程度罪悪感を感じているのだろうか。私は何度も考えた。確信は決して持てなかった。これまで私が見てきた教授の成果の中ではこれが最も的確な一手だった。気の毒な娘は魅力的な目を紅潮した下品な彼の顔に向け命令を待った。彼女は心を奪われ、自分の意志を持っていなかった。「さあ、父親か私かどちらかを選びなさい」耳が不自由であるにもかかわらず、教授は彼女に話しかけた。「お父さんは私たちは解散するべきだと言っている。君は私に

ついてくるべきだと言っているのだが。さあ、どうする？」

答える代りに、一瞬やさしい目つきで教授を見つめたあと、彼女は彼の前にひざまづいた。怒りと悲しみの混じった一種のうなり声を上げ大佐は彼女に向かって突進した。しかし、彼女は立ち上がり後ずさりして、舞台の階段を会場の中へと駆け下り、急いで出口に向かった。そこで彼女は立ち止まり、私たちの方を振り返った。父親はどうしていいか分からず立ったまま彼女を見つめていた。教授は舞台の裏の控室へと姿を消した。それからすぐ、帽子を目深にかぶり、娘のショールを手にして戻ってきた。舞台の端までくると立ち止まって、トルコ石の指輪をはめた人差し指を大佐に向けて振った。

「どうかね？」と彼は叫んだ。「これでも霊的磁場はいかさまかね？」

小柄なユダヤ人は悲鳴とともに請求書を振り回して急いで彼のあとを追いかけたが、教授は自分と出口の間を六歩で走り去り、娘の腰に手を回して勝ち誇ったように出ていった。三十分後、大佐と私は、元を取り損ないうわのそらでガス燈を見つめているユダヤ人をあとにした。

大佐と一緒に私は家路につき、みすぼらしい宿へ彼を送っていった。彼はうめき声をあげ、涙を流し、呪いの言葉を発しながら空っぽになった娘の部屋に独りで入っていった。よろめきながら再び彼が出てきたとき、まるで気でも違ってしまいそうに見えた。私は無理やり彼を私の部屋に連れて帰り一晩を過ごさせた。以前、娘のための施設について話していたが、明らかに施設は彼のために必要だった。

私はときどき彼に会いに行く。代数記号で小さな正方形の紙を埋めることで彼は日々を過ごしている。しかし、彼を監督している人——彼には代数が理解できるのだが——から、それらの記号が整合性のある演算を表しているわけではないと知らされた。ファーゴ教授の新しい「センセーショナル」な公演には私は行かなかった。